

(十月のことは)

宗家

今こそ

明治の偉人に

学ぼう

この十の自粛が始まる頃、後藤新平に本で触れた。敢えて日露戦争迄のと言いたいが、明治の日本人に改めて注目したい。

明治維新なうて急激な発展を遂げた一因は江戸時代に培われた学問力と日本人である事の誇りにあると思われる。

後藤新平は戊辰戦争で敗れた水沢藩(胆沢県、現在の岩手県南部)の出身だ。その胆沢県大参事として水沢に赴任したのが熊本藩出身の安場保和であったが、安場は将来を見据えて、十五歳前後の少年達を給仕として採用し目をかけるが、その中に新平や齋藤実(後に首相)がいた。安場は信頼する部下の一人に新平を託したが、

「この子を下手にいじる事無く、気は荒くともあるがまよいにそだててくれ」と言った。新平にとって安場は終生の理解者、恩人となった。

この逸話には明治の人の心の気高さ、大きさに胸を熱くさせられる。また、世界的な細菌学者、北里柴三郎は彼の良き理解者で熊本の人であり、台湾統治の際、大協力者となった新渡戸稲造は今の岩手県盛岡市の出身。そして後藤新平が大仕事を成した裏に、上司として後ろ盾になったのが長州藩の支藩徳山藩出身の見玉源太郎である。

丁度ここに取り上げた人達には戊辰戦争の西東がない。

この度「見玉神社」の拙詩を同封しますが、改めて明治の偉人達に学ばたい、或いは敬重したいと思うのです。(令和三年十月)